（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　渡辺　匠

本論文は、自己と内集団（自分が所属する集団）の連合がもたらす自己防衛機能に関する心的過程について、自己と内集団成員との主観的類似性の認知、および、自己と内集団との非意識的な連合判断の効果に着目し、包括的なモデルを提示したものである。論文は、これまでの研究の理論的展開と問題点を検討した「理論編」と、実験的検討に基づきモデル構築を行った「実証編」から構成されている。

理論編第 1 部では、自己と内集団の連合がもたらす効果に関する研究を概観し、心的な連合強化が、個人の健康状態や精神状態を向上させる事実を確認した。続く理論編第 2 部では、自己脅威を受けた際の防衛機能について論考を加え、類似性認知や概念連合の強化という心的過程が、さまざまな心的脅威を緩和する可能性があることを議論した。また理論編第 3 部では、従来の研究の問題点として、自己防衛反応の生起を規定する要因の検討が不十分であることや、顕在的（意識的）過程のみならず、潜在的（非意識的）に生起する過程にも着目する必要があることを議論し、「同じ集団に属する他者とのつながり（内集団との連合）」を用いた包括的な自己防衛反応過程に関する理論モデルを提示した。

続く実証編は、理論編で提示されたモデルの妥当性を実験と調査により検討したものである。実証編第 1 部は、自己と内集団の連合と主観的幸福感の関連について検討したもので、研究 1 では調査データの分析に基づき、両者が正の相関を持つことを示し、研究 2 では実験により自己と内集団の連合が主観的幸福感を向上させるという因果関係を明らかにした。続く実証編第 2 部では脅威状況における自己防衛に焦点を当て、研究 3 では自尊心脅威が存在する状況を、研究 4 は死の脅威が高まった状況を対象とし、自己と内集団との連合を強化する反応が顕在的・潜在的両過程で生起することを明らかにした。さらに、実証編第 3 部は、内集団の地位の効果に着目し、研究 5・6 を通して、内集団の地位が低いときには顕在的な自己と内集団の連合が弱くなる一方、それを補償する形で潜在的な連合強化による自己防衛反応が生起することを示した。これらの結果に基づき総合考察では、内集団との連合を通した自己防衛反応に関する変数間の関係を明示した心的モデルを提示し、「集団に所属して生活している私たち」がこのような防衛メカニズムを持つ意義や、内集団の地位に応じた柔軟な防衛メカニズムがもたらす帰結を議論した。

本論文は、複数の内集団所属時の反応や外集団との葛藤関係の影響など、いくつか検討課題を残しているものの、入念な理論的考察と実証的知見に基づき、脅威事態での自己防衛過程について、内集団との心的な連合関係に着目した精緻なモデルを提示したという点で、高い学術的価値を持つと評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士（社会心理学）の学位に値するとの結論に達した。